

JTA通信 第5号

小林秀雄特集風

発行日：2025年6月20日

はじめに

こんにちは、高本です。

早くも5回目となりました。今回は、小林秀雄特集風です。

最近、小林秀雄が書いたものや対談本をいくつか見ていたのですが、それらを踏まえて批評の神様と呼ばれるその哲学も含めて、見てみようという趣旨です。

その前に、最近「相席食堂」を見て思ったことと、この10日で更新した記事について少々。

横田基地が近いからミリタリー古着屋をするという高燃費精神

今週の相席食堂で、東京の福生市の古着屋が出てくる場面がありました。横田基地がすぐ近くにあるということで、米軍のミリタリー系の服が並んでいて、やっぱり環境やその人の特異性に注目していくのが面白いなと。

この店であれば、米軍が近いからこそミリタリー系アイテムを揃えられて、それはやる側でも受け取る側でもそう。自分が何かするとしても今生きてるその生活のリズムとか人間関係とか地域とか、そこから考えるから無理なく自然に動けるわけで、

この古着にしてもじゃあ適当に大阪で同じことしようと思っても、商品を集めてくるのに東京まで行かないといけないのだとすれば大きくコストがかかるのは当然で、客目線でも別にそこで買う必要がないというか、他の店と同じくただの一古着屋でしかない。欲しいのがあれば買うでしょうが、「ここに来たのだからちょっと見に行ってみよう、買ってみよう」という方向からの興味にはつながらない。

別に商売に限らず、海の近くにいるのなら海で遊ぶことから始めればいいし、コミュニケーションが好きならそこから動いていけばいいし、勉強得意ならそこから広げていけばいいし、何というか今ある環境とか自分の状態から始めるのがよくて、

それは今やってないことはできないということではなく、今までやってきた文脈を踏まえてさらに新しいことに向かっていけばいいのであって、つまり今までそれをやってきたからこそ、そこで暮らしているからこそ次のことに応用できるということはいくらでもあり、それを使うのが最も滑らかにいく。

って思いますよね。

最近更新した記事の振り返り

6/11 [進学先を選ぶとなるとどうしたら良いかわかりません。軸を基準とした、「この大学に行くことが自分の人生に絶対必要だ！！」と言ったものを持っていません。【人生の軸Q&A⑦】](#)

6/11 [「強い目的意識があって自分の軸から動いているように見える人と僕は何が違うのでしょうか？」【人生の軸Q&A⑧】](#)

6/11 [「三大欲求並みの欲求の根幹に近い「やりたい事」を未来の理想図に組み込んで良いのでしょうか。」【人生の軸Q&A⑨】](#)

頂いた質問の返信をそのまま載せてるのですが、たしか2万5千字ぐらいあったので、すごく長くなってます。が、質問してもらわないと自分で書こうとは思わない話も死ぬほどあり、もっと言えば、個人の実際的な生活における悩みというか疑問に対して考えてるので、すごく具体的な話になったりします。

つまり、普段の記事で例えば～という時は、自分の話か、ありそうなシチュエーションの想像か、少しばかりの周りでの事例ですが、極めて個人的なことが普遍的だったりするので、こういうのも面白いと思います。というわけで質問あればぜひ連絡してください。

別に最初から記事にしようと思ってるわけでも全部そうなるわけもちろんないので、そこはご心配なくw ただ、この相互のやり取りから全体に広がる感じもエネルギーの循環の仕方の一つではあるので、みんながシステムの一部として動いていく方が楽しいですよ。それはもう間違いなく。

6/20 [なぜ小林秀雄の「批評」に関する哲学を見ておきたいのか](#)

物事を見ていくには角度や文脈があって、急に小林秀雄とか批評とか言っても一人ではしゃいだけみたいになってくるので、ここで足並みをそろえておこう、という内容です。今回の中で一部引用しながら改めて確認します。

6/14 [簡単にラベリングされる日常を過ごす物足りなさ](#)

昔書いた記事をたまたま見たことをきっかけに、「あーこんな感じの人か」って速攻分類されてしまう生活のリズムは物足りなくなってくるという話をしました。前に書いた記事を見返してみるといろいろ発見があったりします。記事に限らずメモやノートでもそうですが、一度考えたことをもう一度考えるというのはかなり面白い時間です。

時間の螺旋性とも言えそうですが、ぐるぐる同じところを回ってるようでいて、それはドリルみたいにちゃんと前に進んでたりします。何年同じこと考えてるねんと思いつつも、でも今日見たときにはその時と違う考えが浮かんできていて、それはその分だけ変化しているということで、二次元平面を円運動しているようでz軸方向にも進んでるものの現れなのです。むしろドリルの方が壁をこじ開けるには向いてそうです。

6/19 [畑の手伝いレポート日記](#)

畑の記事を書こうと思ってたんですが、どういう感じでやろうとか考えてる間に二か月ぐらいたったので、この記事にどんどん日記的に追加していくことにしました。二週間に一回ぐら覗いてみるとなんか文言が増えてるかもしれません。

それはそうと、この前でかいキュウリを貰ってきました。食べてみるとちょっと固い気がしたんですが、逆にこの歯ごたえがいつものキュウリではないことを感じさせてくれる、というすり替えによって何とか耐えました。おいしいです。

というわけで、まずは「批評に自己主張はいらない」「表現したものが批評だっただけ」というあたりから。

本編	3
批評に自己主張はいらない	3
表現したものが批評だった	4
改めて、批評に自己主張はいらない	6
批評は生活教養に属する	6
合理の序列が高すぎる	7
安藤昌益、吉本隆明、シモーヌ・ヴェイヌの思想的つながり	8
感動体験は本人だけの教科書となる	9
実験的精神から自分の学問へ	10
人間の小説性と工作性・言葉の道具性と思想性	11
精神の自由は表現によって証明されなければならない	13

本編

批評に自己主張はいらない

「ドストエフスキという歴史的人物を、蘇生させようとするに際して、僕は何等格別な野心を抱いていない。この素材によって自分を語ろうとは思わない、しよせん自分というものを離れられないものなら、自分を語ろうとすることは、余計なというよりむしろ有害な空想に過ぎぬ。」（『ドストエフスキイの生活』p19）

どうせ自分のフィルターを通してしか喋れないのだから、自分の話しなくてもいいということ。ある対象について語ろうするにも主観が入り混じってくるというか、主観によってしか語ることができない、だからあえて自分の話をしようとする必要はない。

かといって、

「無論在ったがままの彼の姿を再現しようとは思わぬ、それは痴呆の希いである。」

主観的にならざるを得ないから、とも言えるし客観であろうとして取り組んでも面白くない。そもそもその客観自体が見せかけであるが、一応それは認めたとしても、客観であるということは、今の自分の感情やそれが進むようとしている方向を抑制し、もう一つの頭で、そっちが正しいと思っている客観に従わせることになる。つまり感情が満足しない。情緒とバッティングする。

本編に入る前の「序」の部分だとは言え、19ページの間ドストエフスキーの話が一切なく、時間や歴史の話が続いてきた。もちろんそれがここにきてすべて回収されるってことな

んだと思うが、最初の話がぎゅうぎゅうすぎてよく分からなかった。というか一文目からそんなにしっかり読む気にはならなかった。

が、ここでの話につなげて言えば、この19ページの内容を要約しようとするのが、「あったがままの彼の姿を再現し」ようということになる。読んでる中で生まれた流れをそのまま描写することが自分というフィルターを通してその本を見るということで、内容を整えて正確にまとめようする必要はない。当然そこには本人による無意識の取舍選択も行われるわけで、客観は成り立たない。

むしろなぜある箇所が選ばれ、ある箇所が選ばれなかったのか、そこにはその瞬間に考えたことがあるはずで、その思考をそのまま書いた方がおもしろい。本の内容ではなく本を読んで考えたことを書く、もっと言えば本であるかはどうでもよくて、外部の事象や事物に触れて湧き出てきた流れを素直に表現することが、それについて語ることになる。

表現したものが批評だった

この本を読んでも、小林秀雄のこの情熱はどこから来ているのか気になりました。ドストエフスキーの作品はもちろん、それらに関する論文や私的な手紙まで読み込んでと思いますが、それはどこから出てきているのか。

ある人物の生活や哲学が気になってもそこまで調べ尽くしたいとは多分思わなくて、途中で飽きて来る気がします。でもその一方で、例えば僕でもそれぐらいに隅から隅まで知り尽くそうとすることはまれにあり、これも程度の問題というだけなのかもしれない。そんなことを思っていると、この本の中身よりも小林秀雄の批評に関する哲学やその方法の側が気になってくる。

これについて、ブログの「なぜ小林秀雄の「批評」に関する哲学を見ておきたいのか」という記事では次の様に書きました。

小林秀雄の、批評に関する哲学が気になる。

様々な意匠、というデビュー作で、その批評に対しての考えを書いているらしい。批評ってそんな誰ともわからない人が作品について書いたところであまり興味を持たれないような気がするが、素人の時からそれをやる人としての意識があったのかと気になった
もちろんではあるがさっと作品一つ二つ見てそれについて書くというわけではなくて、つまり、そこにはその対象とどう接していくかまたそれをどう表現していくかという一つの哲学があるように感じた。そしてそれを読み解いていくと、別に批評家になるつもりはないが、世界とどのように触れあっていくかというその接地面の上での振る舞いがもう一つ洗練されより面白がれるのではないか、ということ。

つまり、何かと触れたときに、どういう言い方がいいか分からないが、その二つの時間軸が交差するところに最初の出会いはあるとして、それを一点として捉えると互いに通過して何事もなく次のイベントに進むわけですが、その一点の拡大して高い解像度で捉えられるようになると、その0次元の点が3次元の立体のように感じられ一瞬で通過する点ではなく、広さのある広がりのある、より深いところで、その対象との交流が起こってくるかもしれない、この点から立体に拡大する力としての「批評」という感覚、こういう風に捉えておくのがいいのだと思う。

これについて、その批評の哲学というか捉え方の一部が判明した。『読書について』という本の中でこんな感じで出てくる。

「僕は何故君は創作をやらずに批評を書き始めたかと聞かれたら、次の様に答える。自分の言い度い事が批評の形式を自然ととったのだ、と。」 p126

「私も、批評というものが書きたくて書き始めたわけではない。書きたいものを書きたいように書いたら、それが、世間で普通批評と呼ばれるものになった。」 p134

やっぱりそう、自分の表現したいものが先にあって、それが結果としてどんな形だったのか、どんな形式で表されることが自然であるのかというだけ。形式というのは結果論であって、自分の内側から湧き出てくるエネルギーが外に出てくるときに、それがどの形であることが一番自然なのか、エネルギーのロスが少ないのか。

俳優やりたいとか小説家になりたいとか、そういう話はいくらでもあります、満足して長く続けられてる人は、「自分のやりたいことがそういう名前で表現されるものだった」というだけなんじゃないかと思う。

つまり、形式としての演劇や小説それ自体にあこがれたのではなく、自分の衝動の正体が、そのエネルギーが形を伴ったものがそう呼ばれるものだとは判明した、というニュアンス。

ここでの話だと、「批評」に対して「創作」を置いていて、批評と創作のどちらをやればいいのか、なぜ創作じゃなくて批評なのか、「そんなものは自分の言いたいことをまず行言ってみて、それがどの形式だったのかで決まる」ということ。

それで言えば例えば僕の場合、かなり広く解釈すればやってることは創作に含まれるのかもしれないが、別に小説を書きたいわけでも小説家になりたいわけでもなく、ノウハウ本やビジネス書を書きたいのでもなく、何かの発見を論文にしたいわけでもない。

最初はブロガーの作法を見て始まったので、その形式に則って書いていたが、そこから自分が気持ちいい形でやっていくうちに徐々にシフトしていき、少し前にレポートで書いていたような話やこのニュースレターらしき何かが、僕の言いたいことを言うにあたって自然な形式ということになる。批評や創作ではなく、「こういう感じ」だったということになる。

これも頭でどんな文章とかどんな形式とか考えたわけではもちろんなく、普段のブログ記事を書くという運動の中で落ちていたという言い方がふさわしい。

といっても、思い返せばこんな話は遡れば多分高校生ぐらいの時から書いていた。誰に見せるわけでもまとまった話でもないが、メモ帳に並ぶ話題はそんなものが多かった気がする。

つまり、誰かの行為によって形を持って、今僕たちの前に存在している”それ”の表面を見てやる・やらないとか、上手くやる方法とか考えるのではなく、自分の内側から外に出てこようとしている、またはもうすでに日頃の生活の中で形になってしまっている何かが自分にとっての言いたいことであり、それが「批評」と呼ばれるものであれば批評をすればいいのだ、と言える。

改めて、批評に自己主張はいらない

最初に触れた「批評に主張はいらない」ということについても、ここでまた出てきている。

「しかし、もし批評精神を、純粋な形で考えるなら、それは、自己主張はおろか、どんな立場からの主張も、極度に抑制する精神であるはずである。そこに、批評的作品が現れ、批評的生産がおこなわれるのは、主張の断念という果敢な精神の活動によるのである。」（『読書について』 p138）

なるほど、めっちゃおもしろい、つまり、批評においては自分の主張を入れないでいようとするからこそ、批評的生産がおこなわれる。

この一つ前で、「小林秀雄が自分の文章を振り返ったときに、その批評は褒めることが多く、非難や悪口が少ないことに気づいた」という流れがある。

で、じゃあなんでそういう非難のような言い方になるかと言うと、そいつが自分の主張をしようとしているから。そういう人は「非難はよくないけど、でも主張は生産的だ」と考えている。だから別に主張してもいいやんと。

でもそれはおかしいですね、という流れからこの引用に続く。つまり、改めて「批評というのは、自分の主張を抑制するところに立ち上がってくる」のだということ。

批評は生活教養に属する

「批評は、避難でも主張でもないが、また決して学問でも研究でもないだろう。それは、むしろ生活的教養に属するものだ。学問の遠洋を必要としてはいるが、悪く援用すればたちまち死んでしまう、そのような生きた教養に属するものだ。」（p139）

この前のところでは、「近年はもはや学問的知識がないと、印象だけで批評はできようがない」「でもとはいえそんな幅広い知識は生半可なはずなので、その知識があるから批評精神が豊かであることにはならない」という話がある。その上で、「批評はむしろ生活教養に属する」と続く。

自分の印象だけで語ることはできないが、かといってそうやって手広く見ていく学問的知識では中途半端で、それを使ってるからと言ってその批評が力強いということではなく、むしろ**「批評は生活に根差したもの」**であり、学問的知識は上手いこと使われないといけない、という感じ。

この感覚は僕の中で割と近くて、エントロピーとか重力場の話を絡めてみたり、少し前に哲学史とか、今回なら小林秀雄の批評などを見てるのも、すべて最後は「じゃあその上でどうやって今日過ごしていくか」につながる、つながるというかそこに落ち着かずただそれっぽく語っていても仕方がない。

批評というよりは、どっちかと言えば「自分の興味関心の方向に沿ってある体系を作っていく」ようなイメージではあるが、この批評精神をもう少し見ていくとそっちにも生きてくるのだと思う。これは「その対象のあるがままと接し、その特質を抽出していく精神や術で、それが最後は実際的な生活へと接続していくはず」だからであるから。はずとかでもないけど。

これについても次のように書かれてる。

「ある対象を批評するとは、それを正しく評価することであり、正しく評価するとは、その在るがままの性質を、積極的に肯定する事であり、そのためには、対象の他のものとは違う特質を明瞭化しなければならず、また、そのためには、分析あるいは限定という手段は必ず至のものだ。カントの批判はそういう働きをしている。」 (p137)

あるがままを見て、そこから他とは違う性質を浮かび上がらせる、そのためには分析や限定が必要になる。

合理の序列が高すぎる

「小林：それが根底でしょうね。そういう学問についての教育の仕方がまちがっているんじゃないかと思うんだな。いまの恋愛の話じゃないけれど、好き嫌いという問題が後まわしになっている。孔子が言っているね、「知る者は好む者に及ばない。好む者は喜ぶ者に及ばない」。」 (『読書について』 p157)

まあそうか。合理とか計算できるものが重視されて、好きとか喜びの序列が下に来ている。プラトンが芸術教育を「人間の好き嫌いの根本を規定する」という考え方で重んじたのも面白い。

やっぱり、感覚や内面から次の選択や方向が決まってくるような日常の過ごし方がいいと思っている。でもその内側が「計算とか計量的感性」にまみれた状態で考えようとしても難しい、だからやりたいことがないとか分からないとかになる。

「じゃあやりたいことって？」と調べたり考えたりするが、それを求めるときには、数学とか科学的な定義を欲している節がある。もちろん厳密な数学の言語で語られはしなくても、「これ、こういうもの！」という形で、何かそれには形や枠があって、そこに収まっているものを考えにいくイメージで動いている。

でも**「実際は好き嫌いの問題で、何に喜びを感じるのか」**という話だから、合理的に進めてわかるものでもない。むしろ、またどこかで違和感がやってくる。というか、合理というのは「大外れはしてないであろう道」を示してくれるものであり、だから最初の段階においては多分それでも悪くはない、方角を設定したり、もしくは感覚で意思決定することにブランクがあるうちは、漠然とした指針を定めるために合理を使おうとするのも悪くはない。

でもエネルギーの源泉というのはそれで100%捉えられるものではなく、自分の納得感でしかない、この数日、数週間、もしくはこの今日の一日、その瞬間の感情に満たされないものがあるのなら、それは方向の微調整を計ってもいい。

触覚なのかもしれない。触覚の原理は分からないが、というか少し前に昆虫のことが気になっていろいろ調べていたが、また今ここにきて合流した。これはセンサーの問題であって、「何から何をどのように感じ取るか」という問題である。

安藤昌益、吉本隆明、シモーヌ・ヴェイヌの思想的つながり

とにかく「驚き」が大事、人に対しても自分に対しても。「驚かせてやろう」というのがキーワード、驚きは大きな行動のエネルギーになる、これは衝撃とも言えるかもしれないが、想定していた以上のことが起きる、または想定すらしていなかったことがふとした瞬間に発生する、そんなときは勝手に体が動き始める。

最近、中国思想が気になっていて、その流れで江戸の思想家を見ていた、安藤昌益はその一人で、もちろん名前は知っていたが、それほど詳しく知っていたわけではない。この安藤昌益は農業についていろいろ語っていて、さらに見てみると、「直耕」という言葉が出てきた。これは「人はみな自分で食べるものは自分で作り、余ったものは周りに分け与えたり市場に出して売ったりしていくのがいい、出来たものをただ食べるだけの役人や政治家は全然あかん」という発想。

さらに、「この直耕が最も価値ある姿で、ここから離れていくほどよくない状態」とも言っていて、この辺りはかなり共感する部分はある。ただ、個人的には農業原理主義的にまではなる必要はなくて、その人が生活するうちの何割かを自分で生産するようなスタイルがちょうどいい気はする、というか人口に占める農家の割合を考えると多分現実的ではない。結局これもバランスの話で、自分で作ることだけに偏るとどこかでバランスを崩す。つまり、通常の生活があり、また他の生活の楽しみもある中で、1か月のうち例えば10日分ぐらいは自分で作ったもので食事する、というイメージ。

そしてこれ自体も本題ではなく、ここで、吉本隆明が安藤昌益について語っていたことを知った。吉本隆明は以前、『吉本隆明の経済学』という本がおもしろくて、またその考え方も好きな感覚が多くあったのだが、この吉本隆明と安藤昌益に、物理的ではないが、思想的なつながりというか関連があることを知った。さらに、この安藤昌益と似た考え方をしていた人物として、フランス人のシモーヌ・ヴェイヌという人がいるらしい。

ここで、大きな衝撃があった。というのは、吉本隆明は「このシモーヌ・ヴェイヌは女子工員として工場で働いていた」と話していて、それで一冊の本を思い出した。それはある女性が、工場で働きながら書いた本で、日記なのか哲学書なのか分からないが、とにかくその生活から生まれた哲学やエッセイのようなもので、これを少し前に見かけていた。

ちょうどそのときは、日記やエッセイや小説や哲学、思想などが織り交ざったような、カフカをはじめとした、誰かに何かを伝えるために体系立てて書かれたわけでもない本が気になっていて、そういった日記や日々の思索がまとまった形式の本を適当に探していたのだが、ちょうどその本が思い出された。

名前までは憶えていなかったが、「哲学・女性・工場」で完全にその一冊を思い出した。そして今調べてみたらやっぱりそうだった、シモーヌ・ヴェイヌが書いた『工場日記』、しかもアマゾンの著者ページに『根を持つこと』という本があり、これも読んだことはないが昔図書館で度々目していた本で、何度かパラパラ見てみたりもした。

このシモーヌ・ヴェイヌは、僕の生活の中で全く異なる文脈で以前に二度出てきていた。そして今回が三度目である、こうして僕の中で安藤昌益、吉本隆明、シモーヌ・ヴェイヌには思想的つながりがあることが分かった、と言っても別に直接に影響し合っているわけではないだろうが、共通する思想があるのは間違いないだろう、そしてその重なる部分に、僕にとって好きな感覚があることも、これもまた恐らく間違いない。

感動体験は本人だけの教科書となる

これはかなり大きな衝撃というか驚きだった、そしてこの驚きを書かずにはいられない、というわけで、大急ぎでキーボードをたたいているというわけである。だから多分、この三人についてはこの先もう少し深く見ていくことになる。

こういったある種の感動が、人が体を動かすことの根源にある気がしてならない。動きが始まる衝動とその喜びは、感動と驚きに根差している、そしてこの時の感動や驚きは、日常のものとは別に、幼少期の体験も大きいかもしれない。

その時に大きく心を動かされたことは、大人になっても悪い意味でなく引きずることになっているように思う。むしろ、それに感動した事実が、その人がそれから刺激を受け取るセンスがあることを示している。

となったときに、これは子供の体験でなければいけないのか、という問題が出てくる、が、たぶんそんなことはない、大人になってからでも感動体験を積み重ねていくことは大事になる、でもやっぱ、ちょっと話は戻るが、子供の頃のそういった体験は今の生活に直接には影響していなくても、間接的にその影はしみわたっているかもしれない。

子供の時は録画したバカ殿やドリフを何回も見たり、もう少し大きくなってからはアメトーク、リンカーン、ロンドンハーツなどを休みの日には10時間ぐらい見たりしていた、中学生の時は夜更かししてこれまた録画した「さまぁ〜ずさまぁ〜ず」や「にけつツ」というトーク番組を見ていた。

だから多分僕の「面白い」の感覚には、良くも悪くもこういった日本のお笑い芸人やドバラエティで表現される面白さが、かなりの度合いで混じっている。だから文章を書くことについても、面白く楽しいものを想像しようと思えば、こういった面白さを軸にたぶん自然と考えてしまう。

その感性が違っている人には受け入れられないだろうが、でもそこに自分の基準があるのだとすれば、その文体または表現になることが、自分自身にとっての書く事の面白さを担っている部分もあるわけで、そこから大きく外れた形で書くことは難しい。

また、一つの塊としての面白さの感動体験としては「進撃の巨人」や「ハンターハンター」があるので、そこから「どんなときに人は驚き、また面白いと感じ、更に先を読みたくなるのか」考えることもできる、そう、感動体験というのは、その分野におけるその人の教科書となる。面白さやエンタメについては、お笑いやそういった漫画に感動し面白いと感じ、だから自分が表現する上ではたぶん自然と手本にしている部分がある、

自然への感動で言えば、子供の頃に見た宇宙の深淵とえば大げさだが、そういった経験になってくるかもしれない、ある画家に大いに心動かされた人は、それが芸術の一つの基準になるかもしれないし、それは別に絵描きに影響を与えるのが画家である必要もなく、ある映画を見たときの感動体験が画家としての活動に、その美術観に影響を及ぼすともあるかもしれない、

こう考えたときに、改めてやはり、一つの感動体験は、また別の何かに取り組むときの教材になり得る、そこに一般性は一切必要なく、そいつがそれで感動したという事実だけでそいつにとっては学び模倣する対象になり得る。

そしてだからこそそれは一般的に良しとされている多くの人にとっての定番教材から生まれた作品や活動、生き様とは自然と大きく異なる。それがオリジナリティであり、そいつであるということ、つまり、「感動はその人格を構成する極めて重要な体験である」ということになる。

実験的精神から自分の学問へ

ここもおもしろい。

「一回思いついたって、それがなかなか発展しないのです。またやめてしまう。同じことをまた思いつく。今度思いついたときにはもっと先へ行ける。最後に至って初めてこれはいいということで、一つの理論ができ上ってくる。」

中略

「だから人間というものはそういう色々なことを考えているのではなくて、同じことを繰返しているうちに、同じことが発展してきているのではないのでしょうか。」（『直観を磨くもの』 p105）

螺旋的な感覚、違うことを考えているようでいて、ずっと同じことを一つのことを考えている。それが下の方で発展していて、何処かでまた表面に現れてきて、それが前に考えたことから先に進めるという感覚なのかもしれない。

『直観を磨くもの』で「実験的精神」の話が出てくる。日本人は読書を学問することだと思っている節がある。ほんでアメリカのことを読んでアメリカを語ったり、実験的精神についても、それを本で読んで「こういうものか」と思ったりするのだと。その中に福沢諭吉の話がある。

福沢諭吉は「文明論の概略」の序文で、

「現代の日本文明は、過去の文明と新しい文明を一つの観に持っている、一生にして二生を持つような状態、こういう経験は西洋人にはない、そういう特殊な経験を活かして文明論を書く」

というようなことを言っていて、つまり、日本人は西洋の文明と自分たちの過去の文明の両方を経験してるから、西洋人よりも確実な議論ができる。で、実証精神というのはこういうところからくるものだ。自分がいま生活しているその特殊な立場を十分に理解し、それを学問のきっかけとしていく。

「自分が現に生きている立場、自分の特殊の立場が学問をやるときに先ず見えて居なくちゃならぬ。俺は弦にこういう特殊な立場に立っているんだということが学問の切掛けにならないといけないんじゃないのか。」 (p20)

面白いことに、全く覚えてないけどここに鉛筆で線が引かれていて、さらに上の方に「2022 6/2」と書いてる。

多分この日にこの箇所で何か思うことがあり線をひいたのだと思いますが、ちょうど三年経ってより大きなものとなってまた戻ってきた。ここに螺旋的なものを感じる。こういうプロセスが心地いいというか、数か月とか数年の単位で、以前考えていた、または重要に感じていたことにふと戻ってくる。そして二回目に戻ってきたときには、それまでに多くの経験や考えをしてそれらのエネルギーを踏まえて、初めには行けなかったより遠い場所までたどり着ける。

これはまさに「やってくる」という感覚で、郡司ペギオ幸夫の本に書かれていた気がする。個人的には「積極的な受け身」というか、何かが起こる場所まで全力で近づいていき、あとは確率的にそれが発生するまで待つておく、それを忘れて別の何かに取り組んでいく。

そういうニュアンスで、そしてこれが起こってくるには、ログが重要になる。何かに触れ体験し、心が動き頭の中に何らかの流れが発生するその瞬間ごとにそれらになるべくすべてそのままの形で記録していく、この時に大切なのが日付を書き込んでおくこと。いつどこで誰と何をして何に触れてその時に何を感じたのか、それを丁寧に記録しておく。

といってもそれはやりっぱなしでよくて忘れてよくて、また明日は明日の興味に全力で向かっていく、そしてしばらくしてまた気になる問題が出てきたとき、過去のログをふと見返す中で、すでにその問題を考えていた痕跡に気づく。

人間の小説性と工作性・言葉の道具性と思想性

三木清「人間の本質はものを造るにあるという考えなので、ものを造るということは、産業だけではない。すべての文化がそうだし、また人間そのものも造られるものだね。僕は人間というものは小説的動物だと書いたことがあるが、すべての人間は人生に関して小説家だね。そういう意味まで含めて、工作的人間というものを考えなければならぬと思う。」
(『直観を磨くもの』 p23)

おもしろい、小説的という言い方がすごく気になっていて、保坂和志の小説観に近いところがあるように思う。つまり、人が生きていることが小説であって、小説はどこにでもあるというかどこからでも始まるというか、何かそういうものを感じる。そしてそれが大事と言うと薄っぺらいが、そういうフィルターによって世界と接していくおもしろさというのは確かにあって、むしろそうじゃないことによって取りこぼしがめちゃくちゃあることに気づいていこうとすることが生活を面白くする。

言葉を道具として使う、という話が面白い。

「物理学において観測する対象をばらしていき、最後は電子とかを観測しようと思うわけですが、その観測機は原子や電子の集まりとしてできていて、その器械側を解体することでは

きない。観測する以上、その対象を見たり聞いたりするという感覚の部分が必要で、そのためにはすべてをばらすことはできない、つまり、「道具」の存在が必ずあることになる。

物理で言えば量子論以前は、計算によって運動が分かればそれでよかった。実験してもいいけどまあ多分あってるでしょうということでもよかった、でも20世紀になり、観測してみると頭の中で計算した世界と同じということにはならない。その意味で形而上学だけでいいということにはならない、そこに人間的感性が入ってくる」

という話をされていて、そうだとすると、

「物理で言う観測機、画家で言うところの筆という道具が必要で、これは小説家や詩人で言えば、言葉ということになる、でもこのとき『思想としての言葉』と『道具としての言葉』の区別が難しくなる」

と続く。

この後小林秀雄は「詩人の様に一流の人は音楽家が音を使うように言葉を使う」と言っていて、「言葉の道具性と思想性」という考え方が面白い。

ベンヤミンの「言語は自己をそれによって伝達するものではなくて、それ自体が精神的本質だ」と言ったのと近いものを感じる。

道具的性質としては、情報伝達とか何かしらの「効用や目的」を伴うもの、物理学における観測機の様に、達成される目的のために使用される言葉ということになる。一方で言葉の思想性は、「それによって表現される、ある人間の世界認識や感覚・感情のようなもの」

だから言葉の組み合わせや重なりでそういったものを表現する。まさに画家が筆で自らの内部にあるものを表現するように言葉を扱うのが小説家や詩人で、その時の言葉が「言葉の思想的側面」。

ってなると、情報伝達性よりも世界認識や感覚・感情の表現、または概念の創造としての言葉の使い方をするのが道具的であるよりも思想的で、それが小説的ということになってくる。そういう書かれ方をするものが自然というか非作品的な感じ。

これはさっき三木清が「工作的人間」とか「小説的動物」と言っていたのに関連して、小説を一つ書くとかは別に、日常的にそういった「小説的」「思想的」言葉を残していくという過ごし方はあって、むしろそんな言葉や文章を積み重ねたときに、「そこに小説がある」という見方ができるんじゃないかとも思う。

「要するに言葉が道具にならなければならんですから。言葉というのは、非常に観念的なものが、物的な道具と見えてきて、使いこなす事ができるようになるのはむずかしい、詩人の仕事です。詩人の使う言葉は決して観念じゃない。詩人は画家が色を、音楽家が音を使うように、道具的に言葉を使っているわけです。結局小説家でも何でも一流の人はそういうふうに言葉を使い得ています。そういうふうに使えないのはまだ素人なんで……。」（『直観を磨くもの』 p77）

精神の自由は表現によって証明されなければならない

またおもしろい話。ここが今回の文脈ではハイライト。

モーツァルトについて小林秀雄が書いた文章を、湯川秀樹が面白いと言った。その面白いは何にかかっているかというと、「音楽には時間的な序列があるのに、モーツァルトは全体が一気にまとまって曲が出てきた」というような書かれ方をしていたこと。その潜在意識とか直覚にまつわりそうな部分が面白いと。

また、「モーツァルトという音楽家が精神の自由を得ようとしても、音楽は空気の振動である以上、その精神を証明するために物理としての音楽が必要になる」という話が出てくる。

「ある新しい物質的なものに自己が顕現してくる……。」
「空疎論理にも観念にも全然頼らずに、精神性と物性というものが対決している。」（『直観を磨くもの』p96）

この精神性と物性を「まったく職人的な修練」が結んでいるという。

自分の精神の新たな領域やその意味での自由を獲得するときに、その証明として新たな音楽が現れてくる。つまりその音楽には獲得した自由が反映されていて、だからこそこの両者をつなぐものとして職人的な修練がなされている。

つまり、頭の中での道が開けた感、新たな場所にたどり着けた感、というのは、具体的な形として三次元の物理空間で表現される必要がある。これはモーツァルトだから音楽という空気の振動に落とし込むということになるが、創作に限らず生活にすら言えると思う。

体験して学んで考えたことは、その精神の広がりや、実生活で体現されないことには、証明にはならない。

精神の自由を獲得するというのは、つまり、何かを掘り下げていく中で、発見や驚きがあり、思考の枠組みが外れ、それまで見えなかったものが見えるようになり、感じ取れなかったものを感じ取るセンサーが発達し、内側が豊かに変化していくということで、それは表現によって証明されないといけない。

その精神が反映された音楽が生み出され、その精神が反映された生活が体現される必要がある。それなしに、その精神の自由を得たことは証明されない。

そしてこれは他者に向けて証明されないといけないというよりは、自分に向けてである、自分が今日また進んでいきたい方向に快適な方向に進んでいることの証明として、その意味で生活とか技術とか表現とか作品が存在する。

おわりに

お疲れさまでした、今回は小林秀雄についてちょいちょい脱線しつつ見てきました。

ちなみに、小林秀雄の批評の哲学として「自己主張を抑える」というのがあって、最後は「精神の自由の獲得は表現で示されなければならない」とまとめましたが、

お気づきの通り、

僕はゴリゴリに自己主張を入れてしまったので一切批評になっておらず、当初の目的の「批評精神の理解」という、精神の自由の獲得証明が一ミリも出来ておりません。悲しいです。

そんな最中ですが、今回の内容は以上となります。

この第5号で精神の自由を獲得した証明の表現を送ってもらってもいいですからね！w

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございました。